

国際医療福祉大学大学院教授
大熊由紀子先生

向寒の候、先生におかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

「言葉を変えると世の中が変わる」。今回の講義で改めて示されたこの言葉は、医療に限らず社会全体に通じる本質的な指摘だと強く感じました。「寝たきり老人」ではなく「寝かせきり老人」という表現を初めて耳にしたとき、その背後にある視点の転換に思わず息をのみました。この二つの言葉の差異には、本人の状態を表すのか、それとも社会やケアのあり方を映し出すのかという、大きな意味の違いがあります。その違いに丁寧に光を当てる大熊先生の姿勢からは、まさに“記者魂”とも言える鋭い問いかけの精神を感じました。

言葉が人の心にどのように残り、どのような価値観を形成するのか——。その影響力を意識すると、何気なく使われている表現の中にも、私たちの考え方を揺さぶる「仕掛け」に気づくことがあります。耳あたりが良く、記憶に残りやすいキャッチャーな言葉ほど、その背後に潜む意図や構造に無自覚なまま価値観を誘導されてしまう危うさがあります。社会の中で見聞きする言葉や情報によって、私たちの認識がどれほど受動的に形づくられているかを知るにつけ、情報に向こう姿勢そのものが社会リテラシーとして問われているのだと思いました。

後半の HPV ワクチンに関する隈本先生のお話も、医療機関に勤務する者として非常に興味深く拝聴しました。公衆衛生という大義のもと、多くのワクチンが接種を奨励され、自治体の補助制度がそれを後押ししています。しかし、その裏側では、政府・学会・製薬企業の動きに絡み、多額の資金が流れているという話を耳にすることもあります。ただ、そのような構造的背景が一般市民に十分伝わることは少なく、「皆が受けているから」という同調圧力のなかで接種が進んでいる側面も否めません。本来、人々の健康を守る目的であるはずのワクチンが、時に薬害という深刻な事態を招きうるという現実は、医療従事者として改めて心に刻む必要があると感じました。

HPV ワクチンの問題に関しては、薬害の可能性が指摘された段階で一度立ち止まった判断は、結果として「正義」だったとも考えています。エビデンスの再検証は、科学の持つ自己修正機能であり、それを実行できるかどうかが社会の健全さを左右します。

前例のない行動を取る者は、ともすれば「異端」とみなされ、不都合な異端は大きな力によって排除されがちです。これは医療に限らず、あらゆる分野でみられる“政治”的影響とも言えます。しかし、それを見過ごすばかりでは社会が変わることはありません。今回の講義は、私たち一人ひとりがどのような姿勢で情報に向き合い、どのように声をあげていくのかを改めて考える契機となりました。

貴重なお話を伺う機会を頂き、心より感謝申し上げます。

敬具

国際医療福祉大学大学院 医療通訳・国際医療マネジメント専攻
ドラン泰子